

## イエスのことば 第 48 回

あなたがたもそれぞれ自分の兄弟を心から赦さないなら、わたしの天の父もあなたがたに、このようになさるのです。(マタイ 18 : 35)

## □イエスの公生涯の起承転結

起：受洗から、メシア宣言（紀元 27 年の春、過越の祭り）を経て、宣教開始まで

承：メシアとしての権威を現わす。しかし結果的に、指導者層の拒否を受ける

転：弟子訓練

結：エルサレム入城から十字架（紀元 30 年の春、過越の祭り）、復活、昇天

## □文脈の確認

1. 転の部、弟子訓練。十字架まで、1 年余。
2. 紀元 29 年の春、過越の祭りの頃から、同年の秋、仮庵の祭りまでの、約 6 か月間において、イエスは、異邦人の地域へ 4 回、旅行した。異邦人地域への 4 回の旅行は、**退避（リトリート）と休息の時**であったと同時に、**弟子たちの訓練**を目的とした。
3. 異邦人地域へのリトリートを終えて、イエスたち一行は、伝道拠点であったガリラヤのカペナウムに帰還した。
  - (1) カペナウムに帰ってきたイエスたち一行のもとに、神殿税を集める人がやって来た。神殿税はモーセの律法にはないが、その年の神殿税をまだ納めていなかったことを後ろめたく思ったペテロに対し、イエスは自分と弟子たちには神殿税を納める義務はないと教えた。なぜなら、イエスは神殿の主であるからである。しかし、イエスは、筋道を通すよりも、人を無用につまづかせないことが優先することを教えるため、ペテロに命じて釣りをさせ、最初に釣り上げた魚がその口にくわえていた銀貨をもって、自分とペテロの二人分の神殿税を納めさせた。
  - (2) イエスが自分とペテロの二人分の神殿税を納めたことがきっかけとなって、弟子たちの間で、「では、弟子の中でペテロが一番偉いのか」と議論が再燃し、イエスのところに尋ねに来た。イエスは、近くにいた子どもを呼び寄せて、彼らの真ん中に立たせ、誰が一番偉いかなどと議論せずに、子どものように自分を低くしなさい、と教えた。
  - (3) 子どもを題材としたイエスの実際的な教えは、さらに続いた。子どもをつまづかせるな、であった。大人の弟子たちが互いに議論していたことは、まわりにいた子どもたちをつまづかせるものであったからである。この中で、イエスは塩を題材として教えた。塩はよいものである。塩は人間の生存に欠かせない。塩気がないと食物は腐るし、美味しくない。誰が一番偉いかなどの議論をしているのは、靈的に腐るし、信仰生活を喜べない。言うならば、塩気を失っている状態である。そんな議

論はやめて、互いに平和に過ごしなさい、とイエスは教えた。

4. 今回は、教会の信者たちが互いに平和に過ごすための教えである。

### カペナウム帰還 実際的な教え

マタイ 17 : 22~18 : 35、マルコ 9 : 30~50、ルカ 9 : 43~50

□アウトライン

- |                                     |       |     |
|-------------------------------------|-------|-----|
| A) 死と復活の予告 (第 2 回目)                 | }     | 4 月 |
| B) 弟子たちの関心事：誰が一番偉いか                 |       |     |
| C) 神殿税の納入：人を無用につまずかせるな              |       |     |
| D) 誰が一番偉いかなどと議論せずに、子どものように自分を低くしなさい |       |     |
| E) 子どもをつまずかせるな                      | ----- | 5 月 |
| F) 教会の信者たちが「互いに平和に過ごす」ための教え         | ----- | 6 月 |

### F) 教会の信者たちが「互いに平和に過ごす」ための教え

実際的な教えのしめくくりは、教会の信者たちが「互いに平和に過ごす」ための教えである。聖書箇所は、マタイ 18 : 15~35。

教会とは、イエスをキリストと信じる信者たちの集まりを指す。建物ではない。キリストを頭とする、目に見えない組織体である。「キリストのからだ」とも呼ばれる。私たち信者一人ひとり、キリストのからだの一部である。

この教えの時点では、まだ教会は誕生していない。翌年、紀元 30 年 4 月 7 日のイエスの十字架の死、3 日目の復活、復活から 40 日目の昇天、そして昇天から 10 日後（復活からは 50 日目）、紀元 30 年 5 月 28 日の朝 9 時の「聖霊降臨」を待たねばならない。弟子たちの使命は教会を建て上げること、そのための弟子訓練であった。

1. マタイ 18 : 15~17 教会の信者の間で問題が起きたときの解決手順 3つの段階
  - (1) 15 節 第一段階 行って二人だけのところで指摘しなさい
  - (2) 16 節 第二段階 ほかに一人か二人（証人となる人）、一緒に連れていきなさい
  - (3) 17 節 第三段階 教会に伝えなさい（長老たち、牧師たちに） ⇒ 教会の言うことさえも聞き入れないなら、彼を異邦人か取税人のように扱いなさい
2. 「異邦人か取税人のように扱いなさい」 = 教会の交わりから外す
3. 信者が教会の交わりから外されると、どうなるのか

- (1) 神との交わり、兄弟姉妹との交わりから離れることになる。救いは失わないが、信仰生活を送る力がなくなる。
  - (2) それまでは教会の祈りによって守られていた。その守りの外に出ることになる。
  - (3) 肉体の死の時を決める権限がサタンに戻される (I コリ 5 : 5)
4. マタイ 18 : 18~20 まことにあなたがたに言います。何でもあなたがたが地上でつなぐことは天でもつなぐれ、何でもあなたがたが地上で解くことは天でも解かれます。まことに、もう一度あなたがたに言います。あなたがたのうちの二人が、どんなことでも地上で心をつ一つにして祈るなら、天におられるわたしの父はそれをかなえてくださいます。二人か三人がわたしの名において集まっているところには、わたしもその中にいるのです。」
- (1) つなぐ=有罪とする、あるいは禁止する
  - (2) 解く=無罪とする、あるいは許可する
  - (3) 二人か三人がわたしの名において集まっているところには、わたしもその中にいる=17 節の第三段階で、長老たち (牧師たち) の二人か三人が集まって祈り、つなぐのか解くのか、彼らがイエスのみこころに従おうとして決定したことは、「わたしもその中にいる」、主イエスもその決定に参加してくださったことになる。そして、主イエスがその決定を良い結果に導いてくださる。
5. マタイ 18 : 21~22 「7 を 70 倍するまで赦す」→ たとえ話 23~35 節  
人を赦さないなら自分も赦されないという教え・・・救いにおける赦しを失うということではない。神との交わりにおける赦しに関することである。
- (1) 天の御国は、王である一人の人にたとえることができる。その人は、自分の家来たちと清算をしたいと思った。
  - (2) 清算が始まると、まず 1 万タラントの負債のある者が、王のところに来て来られた。・・・1 タラントは 6000 日の労賃相当、1 年 300 日働くとしたら 20 年分。1 万タラントは、その 1 万倍である。
  - (3) 彼は返済することができなかつたので、その主君は彼に、自分自身も妻子も、持っている物すべて売って返済するように命じた。
  - (4) それで、家来はひれ伏して主君を拝し、「もう少し待ってください。そうすればお返しします」と言った。家来の主君はかわいそうに思って彼を赦し、負債を免除してやった。
  - (5) ところが、その家来が出て行くと、自分に 100 デナリ (100 日分の労賃相当) の借りがある仲間の一人に出会った。彼はその人を捕まえて首を絞め、「借金を返せ」と言った。彼の仲間はひれ伏して、もう少し待ってください。そうすればお返しし

ます」と嘆願した。しかし、彼は承知せず、その人を引いて行って、負債を返すまで牢に放り込んだ。

- (6) 彼の仲間たちは事の成り行きを見て非常に心を痛め、行って一部始終を主君に話した。
- (7) そこで主君は彼を呼びつけて言った。『悪い家来だ。おまえが私に懇願したから、私はおまえの負債をすべて免除してやったのだ。私がおまえをあわれんでやったように、おまえも自分の仲間をあわれんでやるべきではなかったのか。』こうして、主君は怒って、負債をすべて返すまで彼を獄吏たちに引き渡した。あなたがたもそれぞれ自分の兄弟を心から赦さないなら、わたしの天の父もあなたがたに、このようになさるのです。(マタイ 18 : 32~35)
- ① 主君から 1 万タラントの負債を免除された家来・・・マタイ 18 : 15 の被害者である「あなた」
- ② ①の家来に 100 デナリの借金のある仲間・・・マタイ 18 : 15 の加害者である「罪を犯した兄弟」
- ③ 罪を犯した兄弟が赦しを求めるなら、何度でも被害者である信者は赦さなければならぬ。それが信者の義務であり、神との交わりを保つ道である。

(8) まとめ

- ① このたとえ話における「赦し」は、交わりにおける赦しに関することである。
- ② Iヨハ 1 : 9 もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます。

私たち信者が、日々の生活の中で罪を犯してしまったとき、その罪をそのままにしておくと、信者は神との交わりができなくなり、ひいては他の信者との交わりもできなくなる。罪を犯したことに気づいたときには、できる限りすぐに、そのことを父なる神に祈り、「私は〇〇をしました。これは罪でした。」と認める。すると、神は真実で正しい方(約束を必ず守る方)であるから、その罪を赦し、同時に私たちが気づいていないほかの罪もすべて赦して清めてくださる。これによって、神との交わりが回復され、私たち信者は神からの力をいただいて信仰生活を行うことができる。また、信者同士の交わりも回復される。

- ③ 兄弟姉妹を赦さないなら自分も赦されないという警告は、救いにおける赦しを失うということではない。Iヨハ 1 : 9 の赦しを受けることができなくなる、という警告である。そうすると神との交わり、信者同士の交わりを回復できず、信者は信仰生活をする力を失ってしまう。兄弟姉妹を赦さないということは、自分で自分の首をしめてしまうのである。